

# 県立新発田病院だより

第58号 2017年3月発行

新潟県立新発田病院

〒957-8588 新発田市本町 1-2-8  
TEL.0254-22-3121 FAX.0254-26-3874  
<http://www.sbthp.jp/>

## 【当院の基本理念】

1. 県北の急性期高度医療を担い、質の高い医療を提供します。
2. 患者さんに優しく安全で信頼される病院を目指します。
3. 保健福祉・医療機関と連携して地域の基幹病院としての役割を担います。
4. 教育・研修を積極的に行ない、医療の未来に貢献できる人材を育てます。

## 目次

- P 1. 巻頭言：その人らしさを大切にした退院支援を目指して  
P 2. 病院トピックス：熊本に医療看護班として行ってきました  
P 3. 医師事務作業補助者(医療クラーク)に求められるのは「コミュニケーション力」・ミニクイズ  
P 4. 研修を振り返って、患者さんの権利、編集後記

## その人らしさを大切にした退院支援を目指して



看護部長 高橋 恒子

友人の親が施設で、輸液もモニターの装着もなく、子供や孫に囲まれ苦しむことなく亡くなったという話を聞きました。最後の迎え方・看取り方を考えさせられたと話していました。きっと本人や家族の意向を病院や施設関係者が調整したからこそ、よい看取りができたのだらうと思いました。

今、私は、電話で「なんともないよ。」と親の声を聞いて健康状態を確認しています。運転もするし田んぼ仕事も段取りを考えながらやっているようです。元気で暮らす秘訣は、「今日やることがあること」「今日行くところがあること」という話があります。全くその通りで、いつまでも元気でいてほしいと願っています。多くの働いている者は、日頃、高齢の親の“もしもの時”など考える暇もなく、気がかりではあるが、何かあったら病院に行くしかないと考えている人が大半だと思います。医療現場で働く私達も、家に帰れば住民の一人であり同様です。超高齢多死社会の到来を前に、2025年問題や地域包括ケアシステム、在宅での看取り、終活といった言葉を最近よく耳にするとします。地域で暮らす側から見ると、まだまだ、何がどのように変わるのか、分かりづらいのではないかと思います。

さて、急性期病院である当院は、毎日、心臓病や脳出血、骨折、肺炎など複数の疾患を持った方々が入院しております。なかには心肺停止状態で救急搬送される方もおられます。人工呼吸器やモニターを装着され、高度医療を要する救急・急性期の医療やケアを経て、回復期、療養期へと向かいます。病院としては、診療報酬上のしほりもあり、この段階が非常に短いのが現実で、「もう退院なのか」と思われる方もいらっしゃると思います。様々な場面で、安堵したり、不安になったりされていることと思います。

平成26年11月開設した地域包括ケア病棟では、医師、看護師はじめケースワーカーなどの多職種スタッフ、院外の関係する方々と本人やご家族の意向に沿って、退院先や健康障害の状況に応じて、時には在宅での看取りを見据えて調整をしております。

看護職には、医療と生活の両方の視点から援助できる力が求められており、在宅看護の研修なども実施しながら育成に努めております。今後も、チーム医療の中で、患者さんやご家族の方々の思いを大切に、最良の治療とケアがなされるよう看護の役割を果たしていきたいと思っております。



## 熊本に医療救護班として 行ってきました

小児科 長谷川 聡



昨年4月の熊本地震の際、新潟県からも4月21日～5月12日までの計22日間、医療救護班が現地で活動しました。私たちはその第3班として4月29日～5月3日までの5日間を担当しました。新潟県が担当した地域は山都町という宮崎県との県境にある山あいの町でした。毎日益城町を通過して山都町に車で1時間以上かけて通っていたのですが、益城町からみた山都町方面が新発田病院からみた二王子岳方面の風景と重なり、今でも二王子岳の向こうに山都町でお世話になった人たちがいるような錯覚を覚えます。

今回私たちは看護師2名、薬剤師1名、臨床工学技士1名と私の計5名で熊本入りしました。メンバーの多くはDMAT隊員（災害急性期に被災地で医療活動を行うチーム）で、発災当初から国の待機基準に従い出動待機していました。結局DMATとしての出動要請はなかった（実際には「2時間後に仙台空港から熊本に自衛隊機が飛ぶから、来れたDMATは運んであげる」とのミッションがあったのですが、当然間に合うわけもなく断念しました）のですが、その悶々とした思いの私たちに県庁から派遣依頼がきました。

山都町では地元の保健師さんたちと一緒に避難所の巡回診療や訪問診療を行いました。もともと人的・物的被害の少なかった地域のため家に帰ろうと思えば帰れるのですが、不安が強いため避難所で生活している方が多いということでした。避難所では体調を崩している方も少なく、希望者の血圧を測りながら話を聞いて回るのが主な活動でした。「2度の震災を経験した新潟から来た」「新潟の時もそうだった」などの話をする心なしか打ち解けてくださるような雰囲気を感じました。避難所は小さな子どもたちや思春期の中高生などが大人に交じって自然にお手伝いをしており大家族のような雰囲気でした。住民の方々も「こういう時には地域のつながりがしっかりしているから自分たちは強いんだ」と口々に話されていたのが印象的でした。

地震後から子どもたちの様子がおかしいと保護者の間で問題になっており、小児科医が来ることを聞いた保健師が「小児メンタルケア相

談」を企画していました。数名のご家族が面談に来られ話を伺いました。「母から離れようとしない」「家に入ることを嫌がる」「怖がっていることを兄弟に馬鹿にされる」などの相談を受けました。熊本はもともと地震などめったに無い地域だったようで、そこに度重なる余震があり住民の方々の不安は計り知れないものがあつたようです。大人でもそれだけ怖い思いをしている状況の中で子どもたちがみせる反応はどれも正常であり見守っていて問題ないことを説明しました。中には言葉を覚えてたの1歳の子が「どーん、こわいこわい」と地鳴りの再現のようなことばかり口にしてることを心配している親御さんもいました。東日本大震災の際にも子どもたちの間で「津波ごっこ」がはやったことを例に挙げ、子どもにとって遊びを通じて現実を認識することは自然であり必要なことであることを説明しました。なお怖さを表現できずに無理している兄弟や親自身（「怖がっているところを子どもに見せてはいけない」とネットで見たが、本当は私も怖いんです、と涙ぐむ母親もいました）のケアの必要性についても触れました。必要であれば専門機関へつなぐことも検討していましたが、保護者の方々とは話をしたことである程度落ち着いた印象でしたのでその後のケアは引き続き保健師にお任せしました。

自分たちが何ができたかは分かりませんが、機会があり遠い熊本の方々をつながりを持つことができ貴重な経験ができました。新潟の地震の時にお世話になった恩を熊本に届け、熊本の方々が次に何かあったらその時は自分たちが恩返しするつもりと話をされていたのが心に残りました。







## 医師事務作業補助者(医療クラーク) に求められるのは「コミュニケーション力」



副院長（医療クラーク委員会） 本間 則行

病院では様々な職種の方がいて、お互い協力し合っていることは皆さんもご存知かと思えます。例えば、医師、看護師、検査技師、放射線技師、理学療法士、臨床工学技士、薬剤師、栄養士、看護助手、窓口会計事務員といった人達です。そうした中で聞きなれない職種として医師事務作業補助者がいます。医師事務作業補助者とは、医師が行う業務のうち、事務的な業務をサポートする職種です。その呼び方は病院によって様々で、医療秘書、メディカルアシスタントなどと呼ばれることもありますが、当院では医療クラークと呼んでいます。

医療クラークの業務内容は、大きく分けると4つあります。もっとも基本的な業務には、診断書、意見書など「医療文書の作成代行」があります。次に電子カルテにおける予約、検査などの「診療記録への代行入力」があり、これは医師の外来診察などに同席して行います。さらには、「医療の質の向上に資する事務作業」として、カンファレンスの準備、がん登録や外科手術の症例登録なども行います。最後に「行政への対応」があり、これは厚生労働省などに報告する診療データの整理などが含まれます。このように医療クラークの業務は多岐にわたりますので、事務作業能力や幅広い医療知識を備えるだけでなく、接遇マナーや個人情報保護に関する知識も必要となります。こうした基本となる資質を身につけるために新たに配置された医療クラークには6ヵ月間に32時間の研修を受けることが義務付けられています。

ところで、新たに医療クラークになるために

必要な、免許や経験などは現在のところ特に規定されていません。複数の民間団体が行う認定試験などがありますが、特定の資格がスタンダードになっている段階ではありません。この職業に就くために必須となる経験もありませんので、様々な背景の実務者が一緒に働いているのもこの職種の特徴といえます。教育背景や経験よりも、むしろ医師や、医師と一緒に働く薬剤師や看護師などの医療スタッフや事務職員との連絡や調整が頻繁に発生しますので、これらの職種と上手く関係を築くことができる「コミュニケーション力」が、何よりも求められる能力といえます。

海外における医療クラークの歴史は非常に長く、1920年代にはアメリカで同様の職種があり、診療録の記載などで活躍していたことが判っています。1970年代には業務の内容が確立し、外来診療などで不可欠の存在になっています。わが国では、地方における医師不足や医師の偏在による病院勤務医の過重労働と疲弊が問題となり、2008年に診療報酬制度で医師事務作業補助者という名前で導入されました。したがってまだ若い職種であり、他の職種との業務分担など多くの問題を抱えています。当院でも2008年から医療クラークが導入され、年ごとに増員され、現在42名の医療クラークが配置されています。医療クラークが本格的に導入されてから医師の負担は明らかに軽減されており、医療を伴に支える大事なパートナーとして今後も活躍していただけることを願っています。



回答は4ページにあります。

3月3日はひな祭り！ひなあられや菱餅など美味い食べ物<sup>ひしもち</sup>が並びますね。さて、菱餅<sup>ひしもち ひしがた</sup>の菱形は何の形を表しているでしょう。

- ①脳 ②心臓 ③肝臓 ④胃

# 研修を振り返って

臨床研修医 程 璐 霏

時間がたつのは早いもので、新発田病院で働き始めてからもうすぐ2年がたとうとしています。上級医の先生方、多くのスタッフの皆さま、そしてたくさんの患者様に支えられて何とか無事に2年間の研修を終えることができました。思い返せば、2年前の4月、医師国家試験に合格した喜びもつかの間、幼いころからの夢であった医師という仕事への期待と、たくさんの不安を抱えて、新発田病院での研修が始まりました。新発田病院は県内でもトップクラスの救急車台数を受け入れており、ここでの研修は多くの症例を経験できる多忙な研修と言われていきます。はじめは、学生のころ座学で勉強したことも、いざ、患者さんを目の前にすると頭が真っ白になってしまい、思うように動けないことも多くありました。そんな中、焦りを感じ、迷いも多く抱えながらも、日々何とかやってこられたのは、やはり患者さんが快方に向かった時の笑顔のおかげでした。その一方で、全力を尽くしたにもかかわらず、悔しく、悲しい思いをすることもありました。これらの経験は、一例も一生忘れることのできない、自身の大切な経験となりました。

この2年間忙しくも、先生方の熱心なご指導のもと、多くのことを学ぶことができました。

たどたどしい自分を見守ってくださり、指導くださったスタッフの皆さまには感謝の言葉しか出てきません。また、同期や先輩、後輩にも恵まれ、困ったことがあったときにすぐに相談しあえる仲間ができました。

来年度からは小児科医として働くこととなり、新発田病院から異動となります。寂しい思いもありますが、ここでの研修で得たものを活かし、子供たちのために尽力していきたいと思えます。また新発田病院で働く機会があれば、今度は恩返しができるよう、今後も勉学に励んでいこうと思います。最後になりますが、同期研修医を代表し、皆様方に感謝を述べさせていただきます。2年間という短い期間でしたが、本当にありがとうございました。



## ミニクイズ ～回答と説明～

正解 ②心臓

ひしもち ひしがた  
菱餅の菱形は心臓の形で、子ども達の永い健康への願いが込められています。ちなみに3色の白は雪、緑は若草、ピンクは桃の花と意味があり、冬から春への季節の流れを表しています。ひしもち菱餅に込められた願いも含めて味わってみてはいかがでしょうか。



## 編集後記

昨年に比べ雪が多い年となりましたが、皆様いかがお過ごしでしたでしょうか。気温が段々と暖かくなり、春が待ち遠しいですね。院外報でも旅立ちの言葉がありました。ひとつひとつのご縁を大切にしていきたいと思うこの頃です。

### 《編集委員》

渡部 和敏	三井田 博	浅野 堅策	齋藤和歌子	齋藤 操	小林由美子
曾我 崇大	遠藤 陽子	小山さくら	白井 篤	小見 政之	岩川 智宏